

第2回 滋賀県高齢化対策審議会 人生100年ワクワク検討部会 概要

1. 日 時：令和元年6月10日（月）午前10時から12時まで
2. 会 場：県庁本館4階 4A会議室
3. 出席委員：遠藤委員、神部委員、馬場委員
4. 議 事
 - (1) 高齢者の社会活動等の現状について（高齢者に関する各種調査結果から）
 - (2) 今後の調査内容等について

【議 事】

（前回の振り返りから）

- ・ 前回の部会では、身近なところに自分の居場所があって、一人一人が役割を持ち、人から感謝・評価されることが、その人の生きがいにつながり、また人生をワクワクさせるものになっていくのではないかと。そういった観点で、これからのワクワク人生をどう支援していくのかを考えていこうということになった。
- ・ 前回はワクワクするライフスタイルの定義について議論を進めたため、高齢者自身だけに目を向けていたが、コーディネート必要性は出てくると思う。みんなが本来もっているセルフケアをつぶさずに、どう地域へ人を引き出すかを考えるにはコーディネートが大切になる。
- ・ コーディネーターもしくはファシリテーターといった、人をうまく繋ぎながら次の段階へ導いていける人材が要所要所にいることが大切。単なる寄り合いで終わらずに、そこから何かを生み出すきっかけを与えてくれる、または人の思いを調整してくれる存在は大きくなっていく。
- ・ 相談に行ける場所がとても大切だと思う。

(1) 高齢者の社会活動等の現状について（高齢者に関する各種調査結果から）

（「シニアの社会参加に関する調査」の報告書から、調査結果について紹介）

- ・ 調査の結果わかったことの1つめは、社会参加の経験は生きがい感を強めるということ。生きがいを感じている割合は社会参加を行っている人では6割近いが、社会参加を行っていない人では4割くらいしかない。明確に差がでている。
- ・ 2つめに、生きがいを感じている人は感じていない人よりも社会参加活動への参加の頻度に特徴がある。生きがいを感じている人は週に2・3回以上活動している。
- ・ 3つめに、なぜ社会参加活動をするのかというとき、生きがいを感じている人は、感じていない人よりも、特に地域貢献を非常に意識している。地域貢献が、その人の生きがいに通じている。
- ・ 4つめに、生きがいを十分に感じている人は、感じていない人よりも生活に充実感を感じている。
- ・ 5つめに、「生産・就業」「教育・文化」「生活改善」の活動を行っている人は生

生きがい感が強い。就労や学習、自らの経験を伝えることが、高齢者の生きがい感を強めている。

- ・ 6つめ、面白いことに、現実にはフルタイムで働いている人の方が少ないが、フルタイムで働いている人の方が、生きがい感が強い傾向がある。多くの方はフルタイムよりもパートタイムの就労の方がニーズが多く、そのあたりをどう考えていくか。
 - ・ 7つめに、学習頻度が高い、よく学んでいる人ほど、生きがい感が強い。学びと生きがい感は密接な関係があるということ。
 - ・ 8つめ、生きがいを十分に感じている人は感じていない人よりも、「教養的なもの」「ボランティア活動に必要な知識」を学んでいる人の率が高い。特に、ボランティア活動に必要な知識・技能に注目すべきだと思うが、そういうことを学んで活かして人は生きがい感を十分に感じている。
 - ・ 最後は仲間という点。生きがいを十分に感じている人は、感じていない人よりも「同好者が自主的に行っている集まり、サークル活動」を行っている率が高い。人との付き合いが、その人の生きがい感を高めている。
-
- ・ 滋賀県は平均寿命と健康寿命の差が大きい、その要因はなにか。
 - ・ 全国的に、平均寿命が長い地域は健康寿命との開きが大きい傾向にあるので、滋賀県の健康寿命が短いということではないと思う。健康寿命は平均寿命に比例して延びているので、滋賀県の健康寿命も長い方だが、差が10年くらいある
 - ・ 順位で見ると、滋賀県の健康寿命は男性22位。女性は44位と最下位に近い。
 - ・ 0.01年違えば順位は大きく変わるかもしれない。順位そのもので比較したときに、どれだけ差があるのかは、このデータだけでは分からない。いろいろな見方があると思う。長生きしていて、それほど健康でないということは、滋賀県は医療や介護が進んでいるようにも見える。全国的に見たときに、長生きするけれど、そんなに元気でないのであればそれは滋賀県にとって大きな問題なので、健康を助長していく施策が必要になるのではないか。
 - ・ 全国との比較データを次回に出してみたい。
 - ・ 滋賀県の医療費の割合は高いのか。
 - ・ 医療が充実しているかどうかという点では、一般的には西高東低と言われていて、西側の方が全国的にみて医療機関の数や医師の数が多く、医療費もかかっていると見えると思う。
 - ・ 健康で自立して長生きできるにこしたことはない。健康寿命を伸ばして、平均寿命との差を縮めていくことに焦点をあてて考えていくことは大事。ワクワクするためには、やはり健康で社会活動や地域活動に参加できる環境が必要。
 - ・ 健康寿命については、東大の調査では滋賀県は全国で1位。データの取り方で異なっている。
 - ・ いずれにしろ、平均寿命と健康寿命の差を縮めていくことが重要な課題だということ。

- ・ 社会的活動を始めた時期について、全国のデータでは「定年退職後」と「60代」とを合わせて4割を超えているが、裏返せば6割の人が定年退職前に社会的活動に関わることを始めているということ。定年退職するまでに、定年退職後に目を向けた情報収集や学習などを充実させていくことが、地域社会へソフトランディングさせる一つのきっかけになるのではないか。
 - ・ 早い時期から社会的活動に関わっている人が多いという印象を受けた。
 - ・ 社会的活動の内容が問題。活動の内容が就労に関係するものなのかもしれない。
 - ・ 男性と女性を合わせた数値なので、もしかすると女性は40代くらいから地域の婦人会などに参加されているのかもしれない。
 - ・ 男女で分けた場合のデータや、社会的活動の内容と始めた時期とのクロス集計したデータがあるか調べてみてほしい。
 - ・ 自治会長が年々若くなっている地域がある。地域の中で自治会長の役を順に回していく中で、段々と若い人が自治会長を務めるようになっていく。
 - ・ そういったケースが40代・50代の社会的活動の一つに含まれているのかもしれない。
 - ・ 働く期間が長くなっているため、退職したときにはなかなか地域活動に参加してもらえないと聞いたことがある。
-
- ・ 「学び」が生きがいにつながっているという傾向は間違いなくあるが、「学び」を地域活動にどうつなげていくのが課題。
 - ・ いきなり地域活動には参加しにくいですが、その前に「学び」があると参加が広がるのではないか。
 - ・ コミュニティカフェなどがあっても、ただ行ってお茶を飲むだけだと敷居が高い。知らない人たちの中に入って行くには勇気がいる。「学び」や「趣味」の場は、それぞれの人が目的をもって行く場なので、地域の中に居場所がない人にとっては入り込みやすいと思う。「学び」の場には共通の話題があり、学習した者同士の仲良くなる確率は単なるたまり場よりも高い。「学び」の場で仲間づくりができると、次の段階の地域活動につながっていく。「学び」の場は、それまで地域社会に関わらなかった人たちが定年退職後に地域になじむ一つの良いきっかけになる。
 - ・ コーディネートする人が必要だということだったが、地域活動をしていない方が地域活動を参加するきっかけをつくるために、どういった支援をしていくとよいのか。例えば、東近江市では75歳の方を集めて1日かけて色々な授業をするといった取組がある。そういったものがあるのか、コーディネーターなどが個別に訪問するような仕組みがいいのか。
 - ・ 市町が生涯学習に意欲的に取り組んでいるかどうかで差が出てくると思う。また、身近に学びの場があるかどうかでも大きく違ってくる。例えば、レイカディア大学は草津市と米原市にあるが、距離が遠いなど、参加できる条件が整っていない市町からだと参加しにくい。それぞれの地域に学びの場をつくる施策が必要になる。地縁型地域と都市部とでも差がある。
 - ・ 「学び」や趣味の場は人間関係をつくりやすい。たまり場と「学び」の場を融合

させたものをつくっていったらどうか。そこにコーディネーターなどを置いて、地域活動につないでもらう。

- ・ この5年くらいでレイカディア大学の卒業生で地域活動をしている人は増えている。
- ・ ただ、レイカディア大学卒業生が活動していることがあまり知られていないので、知ってもらえるようにすることが今後の課題。また、学びの場と活動の場が分かれてしまっているのが問題の一つ。卒業生の活動のデータベースをつくったり、卒業生をレイカディア大学の授業に入れ込むといったことをしてはどうか。
- ・ カルチャーセンターのように知識を与えるだけではなく、学びを通じて人がつながっていく場であることが必要。シニアなど対象者を集めるイベントも、個別のコーディネートもどちらも必要。多様なきっかけづくりをしていくことが必要。
- ・ 女性は、自分から何かをしようとする方が多い。何かをしたい人に、情報を届ける方法、広報が大切。

(2) 今後の調査内容等について

- ・ 質問項目としては、「居場所」といえる場所があるのか。あるなら、どういった場所なのか。居場所を見つけたきっかけは何か。活動していくうえでの仲間の意義。いつから活動を始めたのか。など。
- ・ 家族がその活動をどう思っているのかということも訊いてはどうか。家族が少ない人など家族関係によっても変わってくる。
- ・ 地縁型社会では男性中心になりがち。女性の活躍に注目してはどうか。